

「林知己夫著作ライブラリー」の開設

—— 特徴と意義 ——

〈共同執筆〉

統計数理研究所

大隅 昇

株式会社ビデオリサーチ

森本 栄一

このたび、「小林和夫ライブラリー」を研修室に、また「林知己夫ライブラリー」を大会議室にそれぞれ開設いたしました。「小林和夫ライブラリー」は、故小林和夫氏が、ご生前にご自身で収集されてきた、国内外で出版のマーケティングおよびマーケティング・リサーチに関する貴重な蔵書をご提供いただいたものです。「林知己夫ライブラリー」には、故林知己夫先生がご生前に執筆された貴重な生原稿や関連資料等が収納されております。いずれも、お二人に近い方々から有効活用されることを願って当協会にご寄贈賜りました。当協会は、お二人に敬意を表すため、また両ライブラリーを業界関係者、研究者、学生等の方々に広くご利用いただくため、「マーケティング・リサーチ」誌上で(105号、106号の2号に連載)、これらの概要をご紹介します。

■ はじめに — ライブラリー開設とデータベース化の経緯 —

このたび、日本マーケティング・リサーチ協会のご厚意により、故林知己夫先生の執筆・著作に関わる資料類を「林知己夫著作ライブラリー」として同協会内に開設していただくことになった(写真①)。また、これら著作資料類の簡易データベースを作成し、これを協会会員はもとより広く開示したいと考え、整備を進めてきた。この誌面をお借りしてこれらについて簡単に紹介させていただく。

故林知己夫先生と日本マーケティング・リサーチ協会の関わりは深い。当協会の名誉会員(1985年)、そして顧問(1986年から)を務められ、1999年からは参与(終身)として務められた。先生は数量化理論・数量化法の提唱者として国内外で広く知られるが、この分野に限らず、世論調査・社会調査・市場調査など、調査方法論の理論から実務まで幅広い活躍をされ、我々にとって有用な多くの実用的調査法の基礎を確立された。このほか、日本人の国民性研究、野生動物の生息数推定、医学データの分析など、その研究の範囲は多岐にわたる。こうした業績に対して紫綬褒章(1984年)、勲二等瑞宝章(1989年)、正四位叙勲(ご逝去後)を授与された。今回開設の著作ライブラリーとそのデータベースは、こうした先生の研究成果

資料を閲覧可能な形として実現したものである(写真②)。

実は、林先生は生前にご自分の著作一覧をメモとして記録されていた。またご逝去のあと、ご家族のご了解を得て、我々が書庫に保管されていた著作物のすべてを閲覧し、通し番号を付与して整理を行なった。この著作一覧メモを電子化し、その記録情報と著作物との照合作業を行い、同時にデータベース化を進めてきた。昨年末にこれらの資料保管とデータベースの完成の目途がついたことに合わせ、ここに公開のはこびとなった。

■ 著作ライブラリーの概要

著作ライブラリーに収録の文献資料類は約2000点ある。先生の研究領域は多様であり、研究論文をはじめ著作書籍、新聞・雑誌記事、随想など、多岐にわたる。また、これらの資料類の検索の便を図るために前述の著作データベースを用意した。紙幅が限られるので、収録資料のうち本協会会員諸氏、本誌読者にとって関わりのある市場調査と調査方法論、それに数量化法の分野でランドマークとなった主な著作とその登場の経緯の一端を紹介する。読者諸氏には機会があれば閲覧されることをお薦めする。



写真①「林知己夫著作ライブラリー」設置状況



写真② データベース起動初期画面

1. 市場調査・調査方法論との関わり

第二次世界大戦後、当時の連合国軍総司令部GHQ (General Headquarters)、民間情報教育局CIE (Civil Information & Education Section)は戦後の民主化政策遂行のため、日本語のローマ字化を検討したようであり、これに関連して「日本人の読み書き能力調査」(1948年8月)が実施された。林先生はこの調査設計(標本抽出)・統計分析を担当、その後、1951年になって、この調査報告書の内容が書籍として刊行される(写真③)。この調査の分析過程で、先生は読み書き能力得点の予測を目的に、現在、数量化Ⅰ類として知られる予測手法を考案し、この書にもその分析結果が掲載されている。この調査は、実用的な標本抽出法の開発と取得データの分析手法が一体化した実用研究のあり方など、その後の社会調査・世論調査の基礎となる研究となった。とくに標本抽出法の基礎理論と実用的な調査法について、1951年に『サンプリナー調査はどう行かうか』(東京大学出版会)として刊行され、以後、こうした実務手法が日本国内における調査法の標準的な方式として広く普及する礎となるのである(写真④)。

林先生と市場調査との関わりは密接で、そのきっかけの一つが新聞広告紙面の評価(閲読率の予測分析他)を目的として朝日新聞社広告局内に設けられたAOR研究会(Asahi Operations Research研究会)にある。AORでの実務研究を通じて、調査方法論と数量化法(外的基準のある予測型モデル、いわゆる数量化Ⅰ類)が市場調

査の重要な分析方法として認められ、普及する。これらの一連の研究成果が、当時、朝日新聞広告局に在勤の村山孝喜氏との共著『市場調査の計画と実際』(1964年)として刊行された(写真⑤)。この書はその後の市場調査分野に広く普及し、寄与しただけでなく、医学他の異分野における数量化理論の適用にも大きな役割を果たした。

また、本協会の企画として機関誌『マーケティング・リサーチャー』に「市場調査事始め」の記事が約8年間にわたり連載された。この最終回を林先生が担当され、調査におけるデータ収集のあり方の重要性、正確なデータがあってこそデータ解析の効用が期待できること、統計手法の果たす役割など、“調査の心構え”を語られている。結びの「市場調査事始めは終わっても“市場調査における”事始めは、まだ山のようにある」は、今でも示唆に富む言葉である。のちに協会創立15周年記念として執筆者(8名)による連載記事が合本され、1990年に刊行された(写真⑥)。いずれの記事も当時の市場調査の状況を窺い知ることのできる貴重な情報であり、関係諸氏にとってはいまでも必見の資料である。

2. 数量化理論と市場調査分野への寄与

数量化理論・数量化法(数量化Ⅰ類～Ⅳ類とV、Ⅵ類)は、林先生の独創的な研究成果の顕著な例である(注:ローマ数字の呼称は1964年に鮑戸弘氏の命名によるもので、当初、林先生自身は別の名称を使っていた)。これが初めて登場したのが、犯罪者の仮釈放と再犯予測



写真③「日本人の読み書き能力」



写真④「サンプルング調査はどう行うか」

の分析を目的に提唱された外的基準のある判別分析手法、のちに数量化II類と俗称される手法の原型である。当時の法務府中央矯正保護研修所(現、法務総合研究所)との共同研究の報告書がある(「假釋放の予測、研修資料第1輯」(1949)、「再犯調査の基礎—豫測方法の展開」(1950))。

パターン分類の数量化(数量化III類)も実用の場面から生まれた。ある水産会社の缶詰ラベルのデザイン評価、つまりよいデザインと悪いデザインとは、どのように客観的に評価分類できるのか、この分析の多次元データ解析手法として提案された。数量化III類はフランスのBenzécriの提唱した対応分析法(コレスポンデンス分析)の同等手法として知られるが、遡ること10年近くも早くに実用場面に適用し、登場したことが、国際的評価を高めるきっかけとなった。

こうした一連の数量化法関連の研究論文の多くは、統計数理研究所講義録、統計数理研究所彙報および輯報で報告されている。このほか、数量化法やその思想・考え方をまとめた「数量化と予測に関する根本概念」(統計数理研究所彙報)、一連の著作『数量化の方法』『データ解析の考え方』『数量化—理論と方法—』が刊行され、1990年代以降、それまでの研究の体系化として提唱された『データの科学』(data science)の思想となって登場するのである。そして、これが、先生の単著としての絶筆となった(写真⑦)。

一連の数量化法、とくに数量化III類が市場調査分野のデータ解析場面で果たした役割はきわめて高い。また

その後に登場し、市場調査分野に普及・利用されているさまざまな手法(双対尺度法、等質性分析、多重対応分析法等)の原点となった。

■ データベースの特徴

著作データベースの具体的な機能については、いずれ広報の予定であるので、ここではごく簡単に要約しておく。

- ・ 簡易リレーショナル・データベース・ソフト(FileMaker Pro)を用いている。このソフトはWindowsとMacintoshとの互換性が高く、操作性もよい。
- ・ データベース上の情報を必要に応じてテキスト・ファイルあるいはエクセル形式のファイルとしてエクスポートし、提供可能である。
- ・ 既刊の『林知己夫著作集、全15巻』(勉誠出版、2004)に収録の掲載情報との照合が可能。つまり、この全集に収録の文献資料の現物の有無が確認できる。

■ 今後のこと — 情報開示に向けて —

本著作ライブラリーに保管の資料類およびデータベースは、協会関係者(会員)および一般に公開される予定である。本協会のホームページ上で案内を行うこと、文献・資料類の閲覧および必要に応じてコピーを有料で提供するなどを予定している。具体的な情報公開の方法については、いずれ、当協会のホームページなどで広報の予定である。協会のホームページ情報を一部の学会にリンクすることなども検討している。



写真⑤『市場調査の計画と実際』



写真⑥『市場調査事始め』と表題の墨書



写真⑦『データの科学』

■ むすびにかえて

林先生の一連の研究を著作ライブラリー、データベースというアーカイブを通して改めて俯瞰すると、戦後から現在に至る日本の統計学やデータ解析の発展そのものように見える。調査方法論や数量化法の基礎研究だけでなく、社会学、心理学、自然科学など、広範にわたる応用研究の成果が、戦後日本のこの分野の研究進展のなかで重要なランドマークであったことが見えてくる。現在の統計学や調査関連分野が直面している多くの難問や閉塞感、とくに調査環境の悪化については、早くからその予兆を指摘し、関係者の真剣な取り組みを喚起しておられた。晩年には、こうした危機的状況をブレイクスルーする方向、解決の道筋の一つとして「データの科学」を提唱されてきた。その精神は調査の原点である自らが汗して正確なデータを科学的に集めることであり、今さらながら、その先見性には頭がさがる。

この著作ライブラリーとデータベースが、今後の調査方法論の実用化研究の進展の一助として関係者各位に有効に活用していただければ、これに勝るものはない。

謝 辞

林知己夫著作ライブラリーの開設・保管管理と著作データベースが実現できたことは、ひとえに本協会の田下憲雄会長、役員各位、それに事務局長立石憲彰氏をはじめ、事務局スタッフ諸氏のご理解の賜物である。合わせ

て高柳忠明前事務局長のご尽力とご支援に厚く御礼申し上げます。そしてなにより、貴重な著作・資料類のご提供を快諾いただいた故林知己夫先生ご家族のご厚情に改めて御礼申し上げます。

また、電子ファイル化、データベース記録情報と原本類との気の遠くなるような照合確認にあたっては、村石明彦氏(システム・サポート)、竹下良子さん、林なおみさんのお手をわずらわせた。これらの皆様にもこの場をお借りして、御礼申し上げます。

参考資料

- 1) 鮑戸 弘(2002) 林知己夫先生が残されたもの、マーケティング・リサーチャー、93号、38-40.
- 2) 大隅 昇(2002) 林知己夫先生と多次元データ解析—数量化法、データ解析、そして分類からデータの科学へ—、マーケティング・リサーチャー、93号、41-45.
- 3) 森本栄一(2005) 戦後日本の統計学の発達—数量化理論の形成から定着へ、行動計量学、32巻1号、45-67.

大隅 昇 (おおすみ のぼる)

1972年、文部省統計数理研究所(現:情報・システム研究機構)第4研究部研究員。85年、同調査実験解析研究系助教授。91年、教授を経て2004年4月から名誉教授。理学博士、専門社会調査士。

森本 栄一 (もりもと えいいち)

1999年、東京工業大学大学院社会理工学研究科経営工学専攻博士課程修了(単位取得)。日立製作所を経て、2003年、ビデオリサーチ入社。現在、同社研究開発局研究開発部副主事、専門社会調査士。